

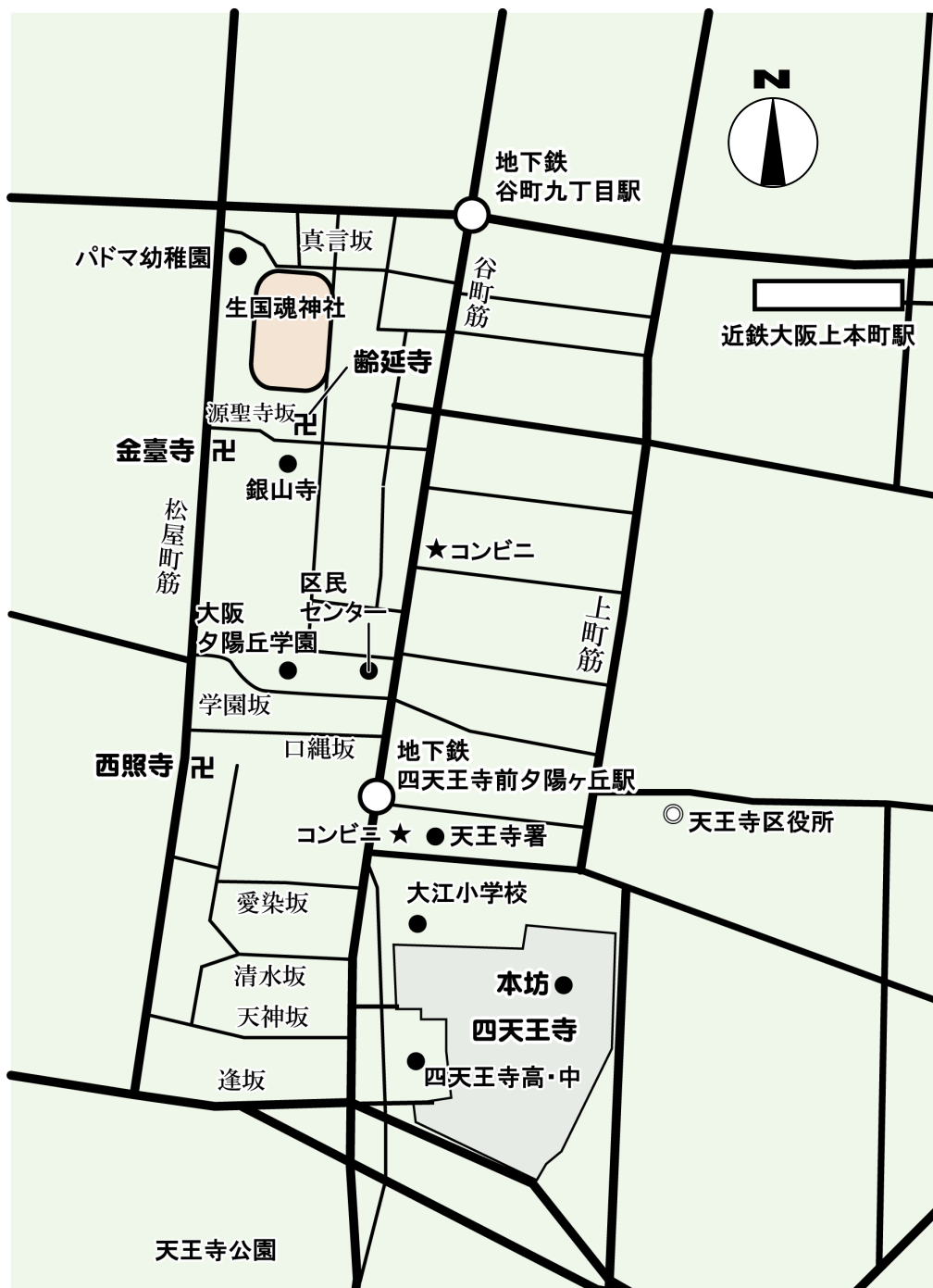
夜空に咲かそう除夜の鐘ツアー

『送るてらまち除夜の鐘 新年を迎える“てんのうじ”』と銘打って、てんのうじ知りたい倶楽部では、天王寺らしさと区民の和を求めて、「夜空に咲かそう除夜の鐘」を企画いたしました。天王寺区仏教会のご協力のもと、四天王寺・齡延寺・金臺寺・西照寺で受け入れを頂き、また、区民の皆様のご賛同のもと除夜の鐘撞きたいを実行いたしました。



主催：てんのうじ知りたい倶楽部

日時：平成 25 年大晦日～平成 26 年元旦



協力寺院紹介

してんのうじ

四天王寺 (四天王寺) 和宗 総本山 本尊：救世観音菩薩

四天王寺は、推古天皇元（593）年の創建です。今から 1,400 年以上も前のことです。『日本書紀』の伝えるところでは、物部守屋と蘇我馬子の合戦の折り、崇仏派の蘇我氏について聖徳太子が形勢の不利を打開するために、自ら四天王像を彫り「もし、この戦いに勝たせていただけるなら、四天王を安置する寺院を建立しましょう」と誓願され、勝利の後その誓いを果たすために、建立されました。

聖徳太子が四天王寺を建てられるにあたって、「四箇院の制」をとられたことが『四天王寺縁起』に示されています。「四箇院」とは「帰依渴仰 断悪修善 速証無上 大菩提所」つまり仏法修行の道場である“敬田院”、病者に薬を施す“施薬院”、病気の者を收容し、病気を癒す“療病院”、身寄りのない者や年老いた者を收容する“悲田院”の四つの施仏教の根本精神の実践の場として、四天王寺を建てられたといえるでしょう。これらの施設は、中心伽藍の北に建てられたようです。（文・写真：四天王寺ホームページより）



四天王寺 五重塔

ごちこういん

五智光院 (四天王寺)

大日如来を本尊とする五智如来を安置し、授戒灌頂会を修する道場で、灌頂堂ともいわれます。また、徳川家代々の位牌を納めており、御霊舎（みたまや）ともいわれました。

五智如来とは、密教で五智を五仏に配すことをいいます。五智とは、法界の自性を明確にする智、鏡の如く法界の万象を顕現する智、諸法の平等を具現する智、諸法を正當に追求する智、自他の作すべきことを成就せしめる智、の意味です。（文・写真：四天王寺ホームページより）



五智光院

れいえんじ

齡延寺 (生玉町) 曹洞宗 生魂山 本尊：釈迦牟尼佛

開創は元和 9（1623）年。志摩国鳥羽の領主稲垣信濃守重種公が父母の菩提のため真田山に創立、寛永 9（1632）年現在の地に移転、元の本堂・庫裏は戦災を免れましたが、阪神・淡路大地震で傷み、新しく再建されました。本堂の柱 22 本の下に 100 年間有効の免震装置が設置され、たたみの床がボタン一つで椅子席に変わるバリヤフリーの本堂になりました。彼岸桜の大樹あり、墓地には幕末大阪の三名医 原老柳、近世大阪の学問所「懐徳堂」や「梅花社」と並び称せられた「泊園書院」の創始者、藤澤東咳とその一族、洋画家の鍋井克之、新々刀期屈指の名刀工左行秀などの墓があります。平成 20（2008）年 4 月に鐘門が完成しました。



齡延寺

こんたいし 金臺寺

(下寺町) 浄土宗 紫雲山常照院 本尊：阿弥陀如来

文明 8 (1476) 年安房国北条にて開創、慶長 11 年 (1606) 大阪安堂寺町に移転、明暦 2 (1656) 年当地に移転、平成の大修理を終えました。本堂天井には龍の彫り物 (左官塗り細工・鏝細工) があり一見の価値大です。本堂は明暦 2 (1656) 年 (江戸初期) に建てられた寺町で一番古い建造物で、鐘楼は江戸中期、山門は江戸後期の江戸時代の古い価値あるもの。本尊阿弥陀如来も大きな立派な仏様です。本堂は檜より高価な榿 (とが) 造りで榿普請は高級な普請の代名詞でした。大坂観音巡り第 28 番札所で韋駄天像は大阪市指定文化財に登録され、現在国立文化財修理所 (奈良) で修理予定。



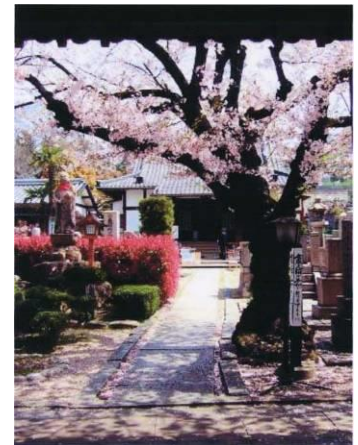
金臺寺

本堂天井の龍の彫り物

さいしょうじ 西照寺

(下寺町) 浄土宗 光明山寿徳院 本尊：阿弥陀如来

光明山寿徳院といい、慶長元 (1596) 年心光利傳を開山上人とする浄土宗総本山知恩院の末寺として開基しました。西寺町の南の桜の名所。山門の左側に十一面観世音菩薩像、右側に安政 6 (1859) 年に作られた佛足石がある。此の辺では古い佛足石。東横堀本町橋と濃人橋にあった浄圓寺の七件の塔頭の一つであり、元和年中、現在地に移転したものである。大阪市外の拡大発展を予測して周辺部へ、又軍事上の見地から有事の時、集結した軍兵の中博施設や外部から大阪へ侵入しようとする敵への障害物として、いずれも大阪城を守る位置に定められたとも言われる。



桜の時期の西照寺

梵鐘について

「梵」はサンスクリット語の「神聖・清浄」を意味する Brahman (ブラフマン：梵天) の音訳であり、日本人に馴染み深い法具 (法要に使用される道具) のひとつです。もともとは時を知らせたり儀式の合図に打ち鳴らす法具ですが、時代を下ると寺の存在を示したり、一般大衆と仏教のつながりを保持する象徴的な存在となりました。日本の梵鐘の最古の記録としては日本書紀に大伴狭手彦 (おおとものさでひこ) が 562 年、高句麗から日本に持ち帰った旨が記されています。また、妙心寺の国宝の梵鐘には、戊戌年 (698 年) の銘があり、製作年代の明らかな日本製の梵鐘としては最古のものとされています。その音色は日本人に愛され、正岡子規の「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」の句はあまりにも有名です。また、平家物語の有名な冒頭部分「祇園精舎の鐘の音、諸行無常の響きあり・・・」が仏の声ともされる鐘の音色の内面性をうまく表現しています。荘厳なひびきと余韻は「この世のはかなさを」を告げる仏の声でもあるのです。

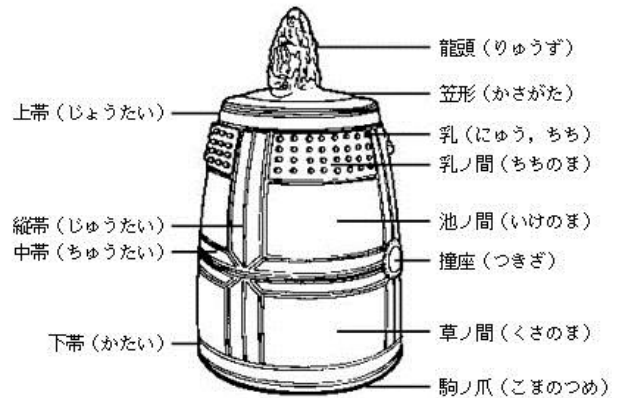
除夜の鐘について

「除夜」とは「旧年を払う夜」という意味で、12 月 31 日の大晦日 (おおみそか) の夜をいいます。古来、一年の締めくくりで特別な日でした。現在のように満年齢が浸透する以前はこの日を過ごすことで歳を一つ重ねるとされており、早く寝ると皺が増えるなどいわれ、夜明かしをする風習がありました。大晦日に 108 回梵鐘を撞く除夜の鐘は宋から伝わったとよく言われますが、日本における起源はよくわかっていません。しかし、梵鐘の最上段、「乳の間 (ちのま)」の装飾である乳の数を調べると室町時代後期から 108 個のものが増えていることから概ね時代は合うようです。108 は仏教では人間が生きるうえでの悩みの種、煩惱の数です。除夜の鐘とは梵鐘の音でこれら煩惱を一つ一つ払い、清浄な気持ちで新年に臨む行事です。

梵鐘を撞く作法

基本的には寺院によってさまざまな作法があります。作法が決まっている場合はそれに従って鐘を撞いてください。ここでは特に作法がない場合の鐘の撞きかたを記します。梵鐘の音は仏様の声です。御仏の声を自分の動作で起こすのですから雑念が入ったり、逆に集中しすぎて無理をしてしまってはいけません。まずは合掌一礼して心を落ち着かせてから撞木の綱を手にとってください。梵鐘を撞く棒を「撞木（しゅもく）」といいます。梵鐘には縦横の帯があり、帯が交差する部分に撞座（つきざ）と呼ばれる円形や花卉の文様がありますのでそこに撞木が当たるように撞きます。少し撞木を前に押し出し、撞座の位置を確認します。その後、大きく後ろに引いて調子よく撞木を繰り出します。ボーリングの投球法が一番似ていると思います。

撞いた後は、反動で鐘を二度打ちしてしまわないよう撞木を軽く抑えます。余韻が大きいうちに二度打ちすると音色が悪だけでなく鐘の寿命も縮んでしまうといわれています。撞き終わったら合掌一礼し、次の方に綱を渡します。時間の都合もありますのであまり長く黙念することは避けてください。梵鐘によっては滑車を組み合わせて一連の動作を再現しているものもあります。この場合、綱を引くだけで簡単に音が出ます。



(寺子屋 NET より)

■集合時間：午後 10 時 00 分

■集合場所：四天王寺本坊

■出発式：四天王寺・五智光院

① 齡延寺 → ② 金臺寺 → ③ 西照寺 → ④ 四天王寺本坊

■注意事項

神聖な場所の拝観となりますので、下記の事項を守っていただきますようお願いいたします。

- 境内では静粛に
- 社殿・お堂内は脱帽
- ペットはご遠慮下さい
- トイレは指示された場所で
- 拝殿では拝礼を
- 喫煙は決められた場所で
- 墓石には上がらないで下さい